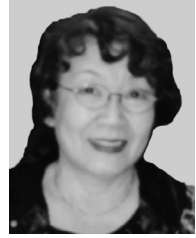


被爆後70年、まだ生きてます

松本 郁子（当時12歳）
札幌市



私は小学校6年生、12歳の時広島で原爆に遭った。私は家の中にいた。街の方が鋭く、白く銀色に光った。轟音と爆風……。気がつくとは私は部屋の一角に目と耳を押さえて小さくしゃがんでいた。真っ暗で息をすることもできない。口の中はジャリジャリ、咽喉は痛い。薄明かりに見えたのは、私の傍には箆笥や仏壇が倒れていて、その隙間にいたために奇跡的に助かったのだ。

そこからどうやって這い出したのか、記憶にない。母は勤労奉仕で街なかに行っていたが行方不明のまま死亡した。通りに出るとピカッと光った方角から、怪我をした人、指先に皮膚を垂らした火傷の人が、まるで絵で見た幽霊のようにして歩いてきた。皆、着衣は焼け焦げて真っ黒である。私もその人たちと一緒に、真っ白な真っ直ぐの道を歩いた記憶がある。黒く垂れ込めた雲間からバリバリ、ゴロゴロと音がする。機銃掃射をしているのかと怖かった。山の麓の農家の家々は大きく開け放たれ、逃れてきた人たちを迎えてくれた。勤労奉仕の女学生たちが大勢そこにいた。全身火傷をして見分けもつかない。火傷にはすぐに蠅が止まり蛆が湧く。大人の人がそれを割りばしでとってあげていたが次々と亡くなった。その夜は一晚じゅう街が燃える紅蓮の炎を見ていた。

次の日からは山裾に木を積んで亡き骸を火葬にした。仲良しの友の燃える火を見ても涙が出なかった。人間らしい心を失っていたのである。私はただ朝出かけた母のことばかりを思っていた。母も女学生と同じ所にいたはずなのに、女学生と同じ姿になるとは思いもしなかった。父は出征していたので私は親戚に交替でお世話になった。8月15日の玉音放送を聞いて、どうして神風が吹かなかったの！と大声で泣いた。学童疎開先から妹が帰り、父が復員してくる10月まで伯父一家にお世話になっ

た。

父の新しい仕事のため九州福岡に移住した。そして父娘3人の暮らしが始まった。私は被爆後下痢が続いたり皮下出血があったりした。病院に行き、広島で原爆に遭っていますと言っても、医師からは怪我も火傷もしなかったから関係ない、貧血には造血剤、ビタミン剤、しまいにはノイローゼとも言われた。6年生であっても受験の勉強もできず希望の学校には行けなかった。

父の再婚を機に私も早い結婚をした。二児の母親になれたが、全身の倦怠感と貧血によって、床に入ると奈落の底に落ちる感じがし、眠ったら死ぬのではないかと怖かった。夫はそんな私にイライラし、酒に溺れてDVがエスカレートした。このままでは子供にも可哀想、何としてでも、と思っていたある日、長崎で被爆したある母親が幼い子供を残して白血病で死す、との新聞記事を読んだ。その時はショック！白血病は死！だったのである。この子達を、母親を傷め続ける父親に残して死んではならない！と思い、大変ではあったが離婚した。子供には私が親から大切にされたようにしてやりたい一心だった。極貧のスタートだったが、二人の子供に育てられて私も今がある。

子供達には原爆体験を話せなかった。米ソの核実験が盛んな頃、子供達はその危険性を理解する事で、母親の体験から自分の将来を悲観してはしないか？と思い、60年間詳細に話した事がなかった。2004年、息子と初めて広島の原爆資料館に行った。見終わった時の息子は優しく、お母さん、こんな事ひと言も私達に話してくれなかったね、と言った。話せなかった母の気持ちを判ってくれたのである。

学童疎開から帰った妹とはよく一緒に手をつなぎ我が家めざして焼け野原を歩きまわった。その妹は1990年に白血病になった。幸いに一命は取りとめたが、今も体調が思わしくなく弱々しい。私は被爆63年たって副甲状腺腫瘍の手術を受けた。長い間心臓の病と同じような症状にも苦しんでいた。一見何事も無いようでも放射能の恐ろしさは続いているのです。二度とあってはなりません。ノーモア広島！ノーモア長崎！ノーモア被爆者！